東京芸術劇場
Tokyo Metropolitan Theatre

tv asahi
なんでも!クラシック2014

tv asahi 55th anniversary

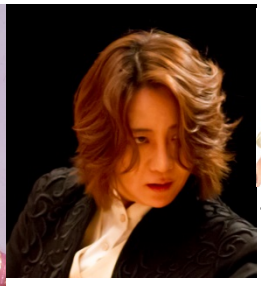
2月6日(木)18:00～　東京芸術劇場　コンサートホール

前夜祭「徹子の部屋」クラシック2014

テレビ朝日の看板番組「徹子の部屋」がスタジオを飛び出します！前回大好評を頂きました「徹子の部屋」クラシックが今回は豊島区・東京芸術劇場に!　ゲストとの楽しいおしゃべり＆素敵な演奏が楽しめるクラシックコンサートです。司会の黒柳が指揮者・西本智実と楽しいトークでオペラを解説。「蝶々夫人」の魅力をギュッと凝縮してお届けするスペシャル・ステージも登場。
黒柳徹子（司会）／西本智実（指揮）／前橋汀子（ヴァイオリン）／レ・フレール（ピアノ・デュオ）
大山亜紀子（ソプラノ）／山下牧子（メゾソプラノ）／近藤岳（パイプオルガン）
東京フィルハーモニー交響楽団（演奏）ほか

S席＝12,000円　A席＝10,000円

黒柳徹子


西本智実
©大木大輔

前橋汀子
©篠山紀信

レ･フレール
©Yuu Kamimaki

大山亜紀子山下牧子　近藤岳

東京フィルハーモニー交響楽団
©K.Miura

曲 目/解 説

いずみたく：「徹子の部屋」テーマ（近藤岳）
「徹子の部屋」は、1976年2月2日に放映が始まったトーク番組で、2010年4月27日、連続8961回を超え、同一司会者の最多放送記録としてギネス世界記録に認定されました。音楽家の出演も多く、クラシック音楽の啓蒙と普及にきわめて大きな影響をもたらしています。冒頭のテーマ曲は、名作曲家、いずみたく（1930～1992）の作品です。

レ・フレール：Boogie Back to YOKOSUKA（レ・フレール）
斎藤守也（1973～）と斎藤圭土（1978～）が結成した兄弟ピアノ・ユニット、レ・フレールの代表作の一つ。2006年のデビューアルバム「ピアノ・ブレイカー」に収められ、ライブでも根強い人気を誇ります。レ・フレールのファンは、略してBBTYと呼んでいます。この他にも数曲演奏の予定です！（曲目は当日発表）

エルガー：愛の挨拶（前橋汀子）
英国の国民的作曲家、サー・エドワード・エルガー（1857～1943）が、1889年、婚約者のキャロラインに贈った可愛い独奏ピアノ小品で、作曲者自身が編曲したヴァイオリン版、オーケストラ版をはじめ、たくさんのアレンジが存在します。当時、裕福なキャロラインの両親は、無名の青年作曲家との結婚に断固反対していたとのこと。将来の妻に捧げた感謝の気持ちがしのばれます。

ドヴォルザーク：わが母の教え給いし歌 作品55-4（前橋汀子）
交響曲第9番「新世界より」やチェロ協奏曲で有名なチェコの作曲家、アントニン・ドヴォルザーク（1841～904）の重要な業績に声楽曲と宗教曲があります。1875年から1877年の間、長女、そして次女、長男が亡くなり、悲嘆に暮れたドヴォルザークは、慟哭を「スターバト・マーテル」（悲しみの聖母）に結晶させます。1880年の歌曲集「ジプシーの歌」第4曲「わが母の教え給いし歌」にも、そのこだまを聞くことができるでしょう。原曲は、「母がわたしにこの歌を教えてくれた昔の日、母は涙を浮かべていた。今は私がこの歌を子どもに教えるときとなり、私の目から涙があふれ落ちる」（堀内敬三訳）と歌われます。

マスネ：歌劇「タイス」～タイスの瞑想曲（前橋汀子）
フランスの作曲家、ジュール・マスネ（1842～1912）のエジプトを舞台とした悲劇、「タイス」の第2幕で演奏される間奏曲を独立させたナンバー。間奏曲ばかり有名となり、オペラ全体の上演はごくまれです。主人公タイスが神に祈って悔悛するさまを描きます。

クライスラー：愛の喜び（前橋汀子）
クライスラー：美しきロスマリン（前橋汀子）
ウィーン生まれの名ヴァイオリニスト、フリッツ・クライスラー（1875～1962）の代表作。いかにも楽都出身らしい情緒をたたえ、世界中で愛奏されています。「ロスマリン」とは、ローズマリーのドイツ語読みで花言葉は「思い出」。この音楽をウィーンの美しい女性になぞらえたクライスラーの意図が鮮やかです。

チャイコフスキー：歌劇「エフゲニー・オネーギン」～ポロネーズ
ロシア最大の作曲家の一人、ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840～1893）にとって、同時期に活躍した国民楽派グループ「ロシア五人組」と異なり、西ヨーロッパ的な洗練をロシア的な要素に課すことが何よりもの命題でした。チャイコフスキーの登場を以て、ロシアのクラシック音楽は、ドイツやフランスと伍する一つのジャンルを切り拓いたといえます。「エフゲニー・オネーギン」は、文豪プーシキンの原作から1878年に作曲された全3幕の悲劇で、第３幕の冒頭、大舞踏会の場面を華やかに彩る「ポロネーズ」が非常に有名です。

プッチーニ：歌劇「蝶々夫人」より
19世紀半ば、絵画、工芸、音楽等日本の芸術・芸能がヨーロッパに紹介され、その表現のユニークさやエキゾチズムから、ジャポニスムと呼ばれる一大日本ブームが巻き起こります。特に美術では、マネ、モネ、ゴッホ、ゴーギャン、ロートレック、ドガ、ホイッスラー等多くの偉大な画家が影響を受けた重要なムーブメントです。一方、音楽でも、例えばドビュッシーと日本の美学は切っても切り離せない関係といえます。ジャコモ・プッチーニ（1858～1924）の「蝶々夫人」の場合、原作をアメリカの作家と戯曲に求めたとはいえ、やはり、パリ、ウィーン等の万国博覧会を発火点とした日本ブームの申し子にほかならず、作曲者自身、1902年のパリ万国博覧会へマダム貞奴こと川上貞奴を訪ね、熱心にアドバイスも求めています。物語は、アメリカの軍人ピンカートンと結婚した長崎の蝶々さんが、やがてほかに妻がいることを知り、一粒種の養育をゆずって自害するまでを描き、「さくらさくら」や「越後獅子」、五音音階等の日本情緒を織りまぜ、全3幕にわたりドラマティックに進行していきます。1904年2月の初演は大失敗でしたが、すぐさま改訂に入ったプッチーニは、わずか3ヶ月後の再演で大成功を収め、巨匠としての地位を確立したのです。

序奏
東洋的な雰囲気を持つ動機をフーガ風に展開した短い序奏です。

蝶々さんのアリア「ある晴れた日に」（大山亜紀子）
第2幕の名高いアリア。ピンカートンが帰る日を夢見ながら、「ある晴れた日に、遥かな水平線のむこう、一筋の煙が立ち上り、そして船があらわれるの」と歌います。

花の二重唱「あの桜の小枝をゆすり」（大山亜紀子／山下牧子）
第2幕、ピンカートンの帰着を知った蝶々さんが喜びにあふれながら、「あの桜の小枝をゆすり、わたしを花々で埋めて下さい」と歌い出し、侍女スズキとのデュエット、「一面に四月を撒きましょう、両手一杯のすみれ、そして月下香を」へ続きます。

蝶々さんのアリア「かわいい坊や」（大山亜紀子）
第3幕、大詰めの絶唱。「ああ、坊や、かわいい坊や、決して知ってはならないのよ、あなたのために、あなたの蝶々さんが死んでゆくことを」と歌われます。

お問い合わせ：チケットスペース　03-3234-9999（月～土10：00～12：00／13：00～18：00）
※料金は全て税込・全席指定となります。
※やむを得ぬ事情により、出演者、曲目に変更が出る場合がございます。